
母親の育児態度に関する一考察

一 子供の独立心・依頼心を中心として 一

篠原しのぶ

両親、教師はいうまでもなく、およそ、子どものことに心を配っている人々は、その子供が身心ともにすこやかに成長してくれることを望んでいる。特に、戦後の新しい教育、新しい倫理では、自分で自主的に、善悪の判断をくだし、生き生きと、意欲的に生きる子供が求められ、自律的、自発的な人間像が追求されるようになった。

ところで、性格は、各人の生活過程に表現されるいろいろな習性の統一の総体である。従って、性格は、生れつき固定したかたちで与えられるものではなく、彼らを取りまいてるすべての条件に影響されながら、それぞれの生活の歴史を通して、次第に学習され、形成されていくものである。人間は、一方において bio-physical な存在であるため、遺伝などの要因によって自然的規定をうけるし、同時に、 socio-historical な存在として個人が交渉を結ぶ多くの人々や、様々な社会的集団などから、直接あるいは間接に、社会的・歴史的規定をうけているのである。したがって、性格形成を研究するには、これらすべての条件からの規定を総合的に明かにしなければならないのであるが、この研究においては、性格形成に対する社会規定のうち、特に家族集団、中でも母親の育児態度の影響と、その独立性、依頼性の面から考えてみたい。

調査手続き

1. 母親の育児態度

母親を幼稚園に招いて母と子をともに一室に入れ、母の子に対する態度並びに会話を観察記録する方法を用いた。各組の観察時間は正味十分で、十一項目について二人の観察者が記録した。

2. 子供の行動記録

保育室で保育されている時間（お話を聞いたり、絵を画いたり、工作をしたり、おゆうぎをしたり）や、昼食時、帰宅時等は、先生が園児の群の中に居て、終始規律と静しゆくをまもるように監督しているので、子供の思いのままの行動は極度に統制され抑圧されているため、この調査の目的とする独立性と依頼性 (Independence & Dependence) は殆んど発現されない。そこで今回は自由遊びの時間、しかも、運動場における自由遊びを観察の対象とした。行動観察時間は、子供一人につき十分である。

3. 被 験 者

Table 1. 被験者

年令	性		合 計
	男 児	女 児	
4才児	11名	10名	21名
5 〃	21	29	50
6 〃	15	14	29
合 計	47	53	100

被験者は、Table 1 に示した通り、男児 47名、女児 53名、合計 100名と、その母親たち 100名である。

記 録 と 集 計 方 法

子供の行動を観察記録したものうち、今回は、依頼性と独立性を現わす項目だけを抜き出して段階付けをし、その子供の性格点とした。即ち、依頼性を表わす項目としては、

- 先生や友達との身体的接触を求める
- 先生や友達の注意をひこうとする
- 先生や友達からの是認を求める
- 先生や友達からの援助を求める

等があげられる。又、独立性をあらわすものとしては、

- 先生や友達からの刺戟を無視して自分の思い通りにする
- イニシアティヴをとる

母親の育児態度に関する一考察

- 他の人からの妨害や攻撃に抵抗する
- 困難をのりこえて最後までやり通す

等である。

更にこの各項目は、次のように0から5までの6段階に分けられている。なお、この段階は、各項目に該当する行動の現れ方の頻度と強さの二つの基準をもっている。

5. 非常に度々且つ非常に強くあらわれる
4. (5)のいずれかが低い場合
3. 度々且つ強くあらわれる
2. (3)のいずれかが低い場合
1. まれに且つ弱くしかあらわれない
0. 全然あらわれない

このようにして出した独立性と依頼性との各項目の段階点の合計を、夫々、その子供の独立点、依頼点とした。

母親の態度記録の方法は次の通りである。(1)先づ母親の干渉行為と見られるものを、11項目、10分間にわたってチェックした総頻数を、その人の「干渉点」とし、その分布状態から、70点以上を「干渉グループ」25点以下を「不干渉グループ」とした。(2)次に、この11項目のうち、特に6項目を選んで、その合計点の多いものと少いものによって「厳格・強制群」と「自由・寛容群」とに分けた。(3)更に子供に接する時に示した母親の雰囲気を取りあげ、その暖いものを \oplus 、後者を \ominus として区別し記録した。

結果と考察

Fig 1 母親の干渉点の分布

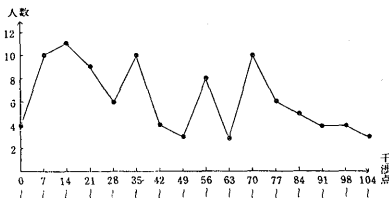


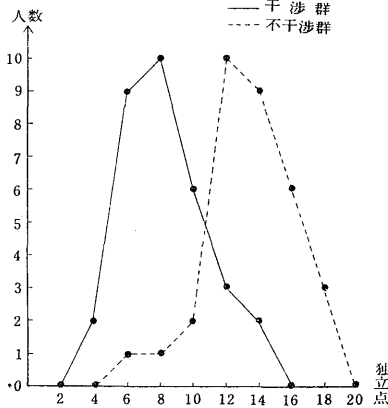
Fig 1 は、母親の干渉点の分布状況である。

干渉点の平均は 53.59 (SD = 30.29) でその分布範囲は、最低 4, 最高 128 であった。つまり、

最高の人は、1分間に12~13回何らかの形で子供に干渉しているということになるのである。そこで、前述の通り、母親の態度のうち、干渉点70以上の者を非常に干渉するグループ、25以下を殆んど干渉しないグループとしたところ、両グループともに、32名の母親が含まれていた。

次に、幼児の独立性についてみてみよう。全被験者100名の独立点の平均は、10.68である。

Fig 2 独立点と干渉・不干渉



これを母親の干渉点による、干渉グループと不干渉グループとに分けて観た結果が、Fig 2 に示した通りの得点状況である。干渉グループの独立点平均は、7.84 (SD=2.65) 不干渉グループの方は、12.85 (SD=2.70) で、この両者の間には、統計的に有意な差が認められた ($t < .01$) つまり、母親の干渉をあまりうけない子供は

干渉の多い母親の子供より、独立性が強いということが出来る。

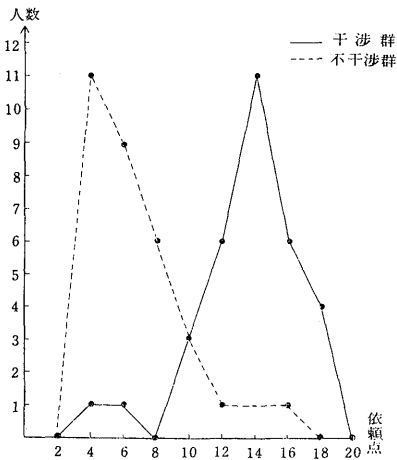
Table 2. 母親の干渉と子供の独立点・依頼点

	干渉群	不干渉群	
独立点平均 (SD)	7.84 (2.65)	12.85 (2.70)	$t < .01$
依頼点平均 (SD)	13.18 (2.86)	6.44 (3.84)	$t < .01$

更に、独立点の場合と同様にして、依頼点に関する得点状況を調べた結果は、Fig 3 の通りである。全被験者の依頼点平均は、9.18であるが、これを、母親の干渉グループと不干渉グループとに分けて観てみると、前者は、13.18 (S

D=2.86) 後者は、6.44 (SD=3.38) で、この両者の間にも1%以下の危険率で、統計的に有意な差が認められた。つまり、干渉の多い母親の子供

Fig 3 依頼点と干渉・不干渉



は、干渉の少ない母親の子供に比して、依頼性が強いということが出来るのである。

以上二つの結果は、母親が子供と一緒に過している10分の間に、よく世話をするか否か、干渉しすぎるか否かということに基づいて、子供の性格特性を、独立性、依頼性という観点からみたものである。つまり、母親の子供に対する関心或いは親心の具体的な表現に

よったものである。そして、この母親の表現は、子供の独立心、依頼心に大きな影響を及ぼしていることがわかった。しかし、子供の性格は、このような具体的な現れのみならず左右されるものでないと考えられる。教育的関心の有無、愛情の豊かさ、叱ったり、ほめたり指示を与えたりする態度の暖かさ冷たさ、柔らかさきびしさ等の影響も受けているであろう。そこで母親の態度記録の際

- 子供に接する時の声大きい小さいか
- 口調が早いかゆっくりしているか
- 語調が荒々しくいららしているかおだやかで落ちついているか
- ほほえんでいるかしかめているか
- 冷いか暖いか

等の諸観点から母親のもつ雰囲気を含め記録し、これに基づいて、態度雰囲気の冷い⊖グループ、暖い⊕グループ、中間の⊕グループを分けた。Fig 4, Fig 5 は、母親の態度雰囲気と子供の独立性・依頼性との関係を示したものである。まず、独立性に関しては、母親の雰囲気の暖い⊕グループの子供の平均が11.32 (SD=3.6) で、雰囲気の冷い⊖グループの子供の

Fig 4 母親の雰囲気と独立点

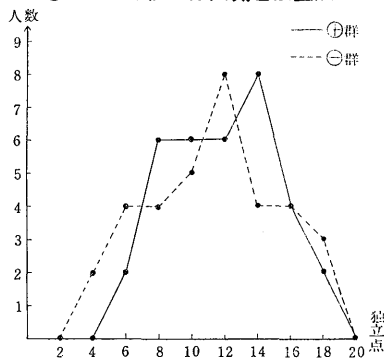
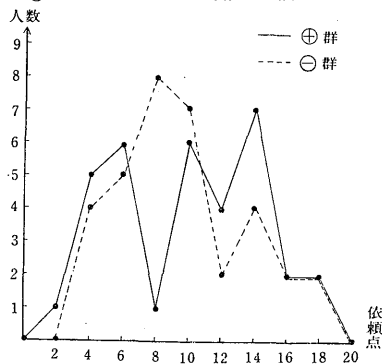


Fig 5 母親の雰囲気と依頼点



平均は10.79(SD=3.89)で両者の間には、統計的に有意な差は認められなかった。又、依頼性に関しては、⊕グループの子供の平均が9.50(SD=4.03) ⊖グループは9.18(SD=3.55)であり、この両者の間にも統計的有意差は認められなかった。つまり、子供に接する母親のもつ雰囲気は、子供の独立性形成の面には、直接影響をもっているということは出来ないであろう。

Table 3. 母親の雰囲気と子供の独立点・依頼点

	⊕ 群	⊖ 群	
独立点平均 (S・D)	11.32 (3.61)	10.79 (3.89)	有意差 なし
依頼点平均 (S・D)	9.50 (4.03)	9.18 (3.55)	有意差 なし

次に、母親の干渉の内容と子供の独立性・依頼性との関係について考察してみよう。先づ、母親の干渉内容から「厳格・強制群」と「自由・寛容群」とに分けたが、その方法は次の通りである。

- A. 否定・禁止・拒否等をする、けちをつける、命令をする等の各項目得点合計の高い方から順に30名
- B. Aの各項目得点合計の低い方から順に30名
- C. 同意・承諾を与える、意見を言って聞かせる、ほめる等の各項目得点合計の高い方から順に30名
- D. Cの各項目得点合計の低い方から順に30名

上記四項目のうち、A・D 両群に共に属するものを「厳格・強制群」とし、B・C 両群に共に属するものを「自由・寛容群」とした。

Table 4. 母親の干渉内容と子供の性格

母親のグループ	独立群	依頼群	合計
厳格・強制群	4名	6名	10名
自由・寛容群	9	2	11
合計	13	8	21

$$\chi^2 < .05$$

この母親の干渉内容と子供の独立性、依頼性との関係をみたものが Table 4 である。表から明らかなように、厳格な母親の子供は、依頼性の強いものが比較的多く、寛容な母親の子供は、独立性の強いものが多いということが出来る。

なお、独立性の強い子、依頼性の強い子というのは、子供の独立性、依頼性各々の得点を Z 得点になおし、前者は、独立点の方が依頼点より 1 段階以上高いもの、後者は、依頼点の方が独立点より 1 段階以上高いものとして評定した。

Table 5 は、子供の独立性、依頼性と母親の干渉との関係を、子供の得点を中心として示したものである。この結果は、前の結果と同様、独立心の

Table 5. 子供の性格と母親の干渉

	干渉群	不干渉群	計
依頼点の高いもの	26名	2名	32名
独立点の高いもの	3	22	30
計	29	24	62

$$\chi^2 < .01$$

強い子供の母親は殆んどが不干渉グループに属しており、依頼心の強い子供の母親は殆んど干渉グループに属しているということを明示している。

次に、独立性、依頼性と年令との関係をみてみよう。先づ独立性に関する平均並びにその分布状況は、

Table 6, Fig 6 に示す通りで、この三者の間に統計的有意差は見出されなかった。依頼性に関する平均並びにその得点分布状況は、Table 7 及び Fig 7 に示す通りで、

Table 6. 独立点と年令

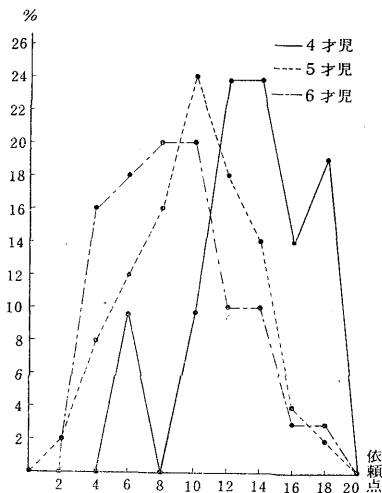
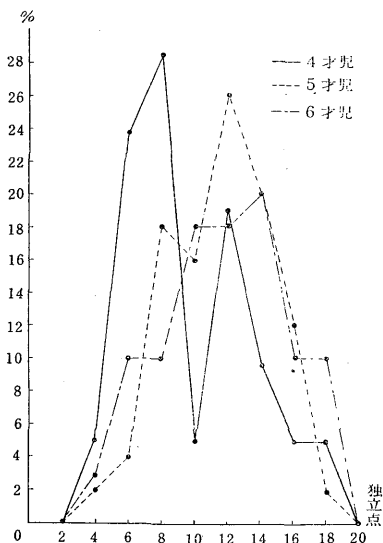
	独立的平均	SD
4 才 児	9.57	3.89
5 才 児	10.01	3.41
6 才 児	9.75	3.80

有意差なし

各年齢間には、夫々5%以下の危険率で統計的有意差が見出された。この二つの結果から、幼稚園に通っているという程度の協同生活をしている子

Fig 6 年齢別の独立点得点状況

Fig 7 年齢別の依頼点得点状況



供達は、独立性という点においては、大した進歩、成長を認めることが出来ないが、依頼性という点では、年齢が進んでいるもの程、換言すれば、長期

Table 7. 依頼点と年齢

	依頼点平均	SD
4才児	13.50	3.52
5才児	10.90	3.14
6才児	8.24	3.65

$x^2 < .05$

間幼稚園における保育を受けているものほど、その依頼心が少なくなっていくという事が出来る。

次に、独立性・依頼性と男女の関係をみてみよう。独立性における男女の差は、Table 8にも示す

通りで、男女間には統計的有意差はない。又、依頼性に関する得点平均の男女差にも、統計的有意差は見出されなかった。つまり、幼児の独立性・依頼性は、男であるか女であるかによって左右されるものではないという

母親の育児態度に関する一考察

Table 8. 性格と性差

	依頼点 平均	(SD)	独立点 平均	(SD)
男	9.96	(4.11)	10.17	(2.79)
女	9.07	(4.10)	11.02	(3.67)

ことが出来る。

尚、知能による差も、この調査に於いては見出されなかった。

更に、知能テストを行う場合に、

母親を同席させて、その態度を観察したところ、干渉群のうち28人(87%)がテスト中、子供に指示を与えたり、急がせたり、叱ったり、機嫌をとったり、子供が出来ないことをテストに恥じたり、という態度をとっていた。この第一回目の知能テストから三週間たって、今度は幼児とテストの二人だけで、第二回目のテストを実施した。この時、テスト自体の難易による影響を防ぐために、半数は第一回目に乳幼児精神簡易検査を、第二回目には田中点数式知能テストを用い、残りの半数は、その逆の順序でテストを用いた。又、幼児の時間的なものによるコンディションを出来るだけ同じにするために、第一回目のテストと同じ時刻に同じ被験者のテストをするようにした。

その結果、第一回のテスト時の知能指数平均より、第二回の知能指数平均の方が5.8上昇していた。この中で、知能指数が11以上上昇したものをだけを選び出したところ、30名あり、そのうち、第一回目の知能検査時に、母親からの干渉を頻繁にうけていたものは21名(70%)であった。又、母親の干渉の多い子供は、テスト中も、常に母親の顔色をうかがったり、指示を待ったりするものが殆んどであり、テスト成績も、言語検査が作業検査に比して劣っている、という傾向がみられた。つまり、干渉の多い母親が横にいと、子供は、自分の思い通りに、自由なびのびとした反応を示すことが出来なくなり、テスト成績をも下げるという結果になっているということが出来る。

以上、母親の子供に対する態度と子供の性格特性との関係の一部を、観察によって調査してみたのであるが、干渉の多い母親の子は、干渉の少ない母親の子に比して、独立心が弱く依頼心が強いということ、干渉の内容が

権威的なものの方が、寛容なものより独立心が弱く依頼心が強い、という結果が明らかになった。つまり、母親がどんなに教育的関心の高い人であろうと、暖い愛情の持ち主であろうと、干渉が多いということは、子供の独立心を養うための益とはならない。やさしく、暖かく注意したり、教育しようとしたところで、それが度重なれば、それは、干渉の過多にすぎず、結果は、母親の教育意図とは正反対の現象を子供の性格にうえつけることになるのである。

最近我々が行った、日米独三ヶ国の育児態度に関する比較調査によれば、日本の母親は他国の母親に比して、子供に対して、コントロールの少ない、特に、権威的な干渉の少ないガイダンスを行っている人が次第に増えて来たという結果が出た。殊に、進歩的・文化的生活をしている家庭ほどこの傾向が強い。又、別の調査では、母親の学歴が低いもの程、溺愛・過保護的、或いは、専制・権威的育児態度を示すものが多いし、職業をもっている母親は、逆に、溺愛・過保護型、専制・権威型の者が少ないという結果が出ている。

母親には、豊かな愛情、教育的関心、情緒的に安定した性格が必要であると同時に、育児をする時の具体的な場面におけるテクニックも亦、必要なことである。育児は、愛情にもとづかねばならない。しかも、その愛情は、常にえい智によって導かれ、照らされ、制約されていなければならない。えい智に満たされた、温かく且つ広い愛情の枠の中で子供の生活が見守られて居るならば、子供は、好ましい性格をその中に形成していくに違いないと思う。

要 約

この調査においては、子供に対する時の母親の態度と子どもの性格形成との間に、どのような関係があるかを検討した。

1. 母親の干渉を頻繁にうける子供は、母親からの干渉をあまりうけない

子どもに比して依頼心が強く独立心が弱い。

2. 母親の干渉が少い子どもは、独立心が強く依頼心が弱い。
3. 母親の雰囲気があたたかく柔いものと、冷くいらいらしたものとでは、その子供達の性格に、統計的有意差が認められなかった。
4. 母親の干渉内容が、厳格・強制群に属する子どもは、依頼性の強い行動を示すものが多く、自由・寛容群に属する子どもは、独立性の強い態度行動を示すものが多い。
5. 独立性に関しては、各年令間に統計的有意差が見出されなかったが、依頼性に関しては、年令が高くなるにつれて薄くなり、各年令間には、それぞれ統計的有意差がみとめられた。
6. 男児と女児との間には、独立性、依頼性ともに、統計的有意差はなかった。
7. 知能の高いものと低いものとの間にも、有意差はなかった。
8. 干渉の多い母親の同席のもとで実施した知能テストの成績は、母親が居ない時のテスト成績より有意に低い。

〔文 献〕

1. E.K. Beller : Dependency and Independence in Young Children (The Journal of Genetic Psychology, 1955)
2. G. Heathers : Emotional Dependence and Independence in Nursery School Play (同上)
3. 篠原・梁井：両親の教育態度と児童の適応に関する研究（日本教育学会第二十二回大会発表，昭・38）
4. 梁井・篠原：育児相談にみる母親の育児態度（教育と医学第11巻第9号，昭・38）